

関根正雄先生の逝去を悼む

古川明

日本医史学会名誉会員関根正雄先生は平成四年一月八日に逝去された。明治三十九年五月一日生まれだから満八十五歳だった。先生は東京に生まれ、明治中学を経て慶応義塾大学医学部に学び、在学中はボートの選手として活躍した。昭和五年に卒業して医師となり、体が良かったので、陸軍衛生部幹部候補生として麻布の歩兵第三連隊に入隊し、きびしい訓練を受けた。除隊後結婚して、二男一女がある。

関根先生は耳鼻咽喉科を専攻し、母校の教室のほか、南洋庁のパラオ島の病院に約四年間勤務した。その後母校の寄生虫学教室で研究して、昭和十五年に学位を受けた。戦時中は中島飛行機会社の足利病院に勤務したが、昭和十六年七月に

召集を受け、軍医として満州に渡り、国境付近の三等陸軍病院に勤務した。終戦後はシベリアに抑留されて苦勞し、昭和二十三年一月に、ようやく内地に帰還することができた。

関根先生と筆者とはほとんど同年代であり、ともに慶応の医学部出身で、且つ若いときに同じく歩兵第三連隊できびしい軍隊教育を受けた。しかしお互いに知り合ったのは、日本医史学会の会員になってからである。二人は数年前同時に、医史学会の名誉会員になったのだから、もうすでに三十年以上の長い間親交を深めたことになる。これからの余生をともに語りあって、医史



関根正雄名誉会員

学の勉強にすぎなかったのに、誠に残念で淋しい限りである。

戦後関根先生は昭和二十三年から、群馬県の太田病院耳鼻咽喉科に勤務した。病院は昭和三十一年に総合病院となり、先生は三十三年から四十三年まで病院長だった。また同病院の高等看護学院の創立に功績があり、学院長を長く勤め、多くの看護学生を養成した。その功により、平成元年七月には、日本看護学校協議会から感謝状を受けた。

関根先生は日本医史学会に入会してから、それまでに関心を持っていた仏教の医学関係の歴史をテーマに選んだ。医史学会の会員でその方面の先輩、杉田暉道、中田直道の両先生を師として、専門的研究を進めた。その結果として、「仏典のなかの香婆とその医療」、「維摩經典のなかの人間の疾患」、「瑞方面山の釈氏洗淨法」などの報告がある。

また中学時代に通学するとき、毎日下谷の山谷町から市電に乗っていたので、『蘭学事始』に出てくる「山谷の茶屋」を思い出し、小塚原に至るこの付近の地誌を詳しく調査した。その結果昭和四十八年八月の第七十五回日本医史学会総会と第十六回蘭学資料研究会との合同会議（東京）に、『解体新書』に関係ある演題として、「小塚原と山谷との管見」の講演をした。

関根先生は昭和五十年代に約十年間、独協大学医学部の医史学講師を勤めた。また海外旅行で医史学の見聞をひろめるため、ロンドンやエジンバラなどを訪ねている。その結果として、「ドクター・ノックスとパークスの事件」、「イーディス・キャベルの記念像」などの報告がある。これからもヨーロッパの方々を訪れたかったようだが、病気のためその希望が実現できなかったことは誠にお気の毒だった。

関根先生は晩年太田から東京の池袋に転居したが、太田時代には医史学会の例会に出席するのが楽しみのようだった。酒を好み、帰路には仲間を誘って、お茶の水駅付近で一ぱい呑んでから帰宅することが多かった。先生が天真爛漫だったことは、「医史学と私」の「はじめに」の文によく現われているので、ここに引用してみよう。

日本医史学会は、世にも有難き学会である。歴史が古い。ご承知の通り日本医学会では、通し番号で第一号学会であ

る。それでいて学閥がない。誰でも勉強すれば会員になれる。東洋医学グループとか、シーボルトグループとか、グループはできるが、リタイアも自由である。会員たちには壁はない。

最後に、謹んで関根正雄先生の霊の御冥福を祈り、御遺族の御多幸を心から念願して、追悼の文とする。

(東京都)